

22) このことについては、前掲註9の野口氏の論文に詳しい。しかし、小銅鐸と小型銅鐸とは、野口氏が指摘されているように形態的に差があるものの、本文中に記したように分布や出土場所、文様や内凸帯をもたないものが多い等の点で類似点も多く、どちらもその性格づけに関しては現在のところ明確ではないため、両者と銅鐸との関係等についてさらに検討の必要があ

ろう。

追記

本文脱稿後、草刈32号墳の下層の調査が行なわれ、弥生後期の住居跡5軒（うち1軒は長径10mの大型住居跡）・古墳前期の住居跡1軒・円墳2基（後期古墳）・土壌等の遺構が検出された。

## 土錘小考

——房総半島における弥生時代以降の漁撈について——

岸 本 雅 人

### 1. はじめに

漁具に取り付けられる「おもり」を「沈子」という。発掘調査において出土する「沈子」は「錘」として総称されているのが一般的であろう。しかし「錘」とは広い意味での「おもり」のことであり、ただちに「錘」が「沈子」としての用途を示すものではない。重さを増すという機能は共通であるが、その用途は多目的であると考えられる。(文1) ここでとりあつかう「錘」とは、用途が単一的に漁撈具の一部品(文2)、つまりは「沈子」として使用されるものに限って見ることにする。

「錘」は時代によって形態等が多少異なるが、その材質によって大きく石錘と土錘に分けられる。(文3) 弥生時代以降になると、石錘は加工が困難であることもあってか、土錘に比較すると出土数は減少する。その点土錘は、重さ・形態等が自由に变化でき、大量生産が可能なためか、石錘よりも頻繁に用いられるようになったと思われる。

現在、わが国において認められる最古の漁撈活動は、縄文時代早創期に求められる。(註1) 房総半島においても縄文時代の貝塚から出土する魚貝類の遺骸が示す通り(註2) 縄文時代に漁撈活動が盛んに行われていたことは周知の通りである。また、漁撈活動に適する地理的条件を具える房総半島では、縄文時代中期から後期にかけて大規模な貝塚の出現を見る。このように、貝塚の広範な分布からであろうか、房総半島では縄文時代の漁撈についての研究は早くから進められ、現在では

その内容はほぼ明らかにされている。一方、弥生時代以降の研究は、農耕の伝播による経済基盤の変化から漁撈活動が副次的なものとして位置付けられ、その研究は進展を見るに至っていないのが現状であろう。しかし、出土土錘を詳細に見てみると縄文時代より、数量的には増加の傾向があり、形態的には現用例のものとはほとんど変わらない程の定型化を示してくるようである。このような状況をふまえると縄文時代よりも大きく進展した漁撈具による漁撈活動が行われていたと考えられる。また、そのことは弥生時代以降の農耕社会が内在する経済基盤のあり方、つまりは経済基盤の多様化(農耕文化自体がすでに漁撈文化的側面を内在しているということ)が示唆されるのではないだろうか。

いずれにしても漁撈活動は数々の進展を経ながら連続して現在まで継続する。

以下、房総半島における弥生時代以降の漁撈活動の一端を出土土錘で見てみることにする。

### 2. 出土土錘のタイプ (図1参照)

縄文時代遺跡出土の石錘は形態的にはバラエティーに富み、土錘としては土器片錘が大多数である。一方、弥生時代以降の石錘は減少、土錘は定型化の傾向をたどる。今日、土錘の形態分類もなされているが、報告書等では今だ統一性は認められないようである。本項では文章を進める上で便宜的に大まかなタイプと名称を付すことにする。

図1は県内出土土錘のうちタイプ別に模式化したものである。(本来ならば土器片錘も入るのではあるがここでは省略する)

- ①球状土錘—有孔で球形を呈す。成形は雑なものが多く、正球形のものは少なく大多数は歪みがちのものである。
- ②管状土錘—円筒形を呈し、長軸方向に孔を有す。
- ③管状土錘—②と同様であるが、径が長さをうわまわる。
- ④楕円状土錘—縦断面形が楕円形を呈し、胴ぶくらみで径は両端でやや小さくなる。
- ⑤円錐状土錘—形態的には④に含まれるものであろうが、細く、やや両端が尖る。
- ⑥有溝土錘—①から⑤までのタイプ別の外面に一文字ないし十文字等の凹溝をめぐるしたもので、凹溝だけで孔を有さないものも含む。

⑦工字形土錘—横断面形が工字状を呈すもので、長軸方向の孔は有せず、一部では短軸方向に付随孔を有するものも含む。

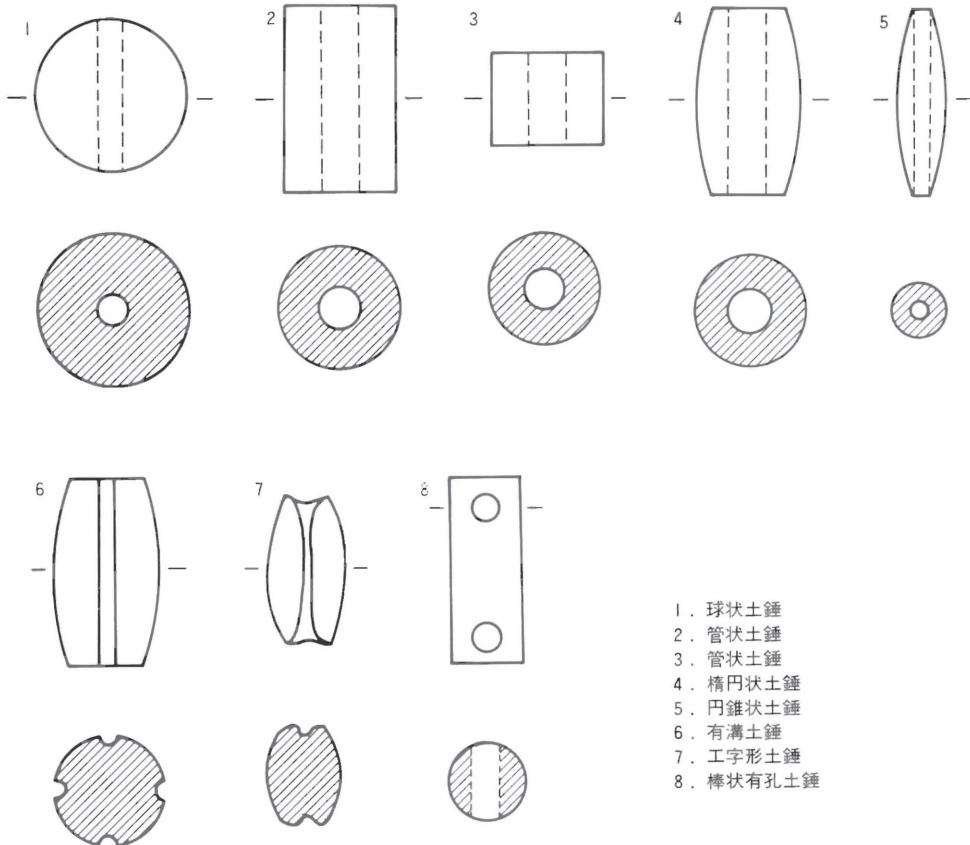
⑧棒状有孔土錘—棒状の両端近くに2孔を有し、若干の扁平を呈するものも含む。

以上、大まかにはこのようなタイプに分れると思われる。以下、若干の説明を加えてみることにする。

縄文時代はバラエティーに富む石錘、また、土器片錘が不変的に認められるが、弥生時代以降は石錘は減少する。土錘のなかでは図1の球状・管状・楕円状・円錐状土錘等が主体となる。

2は中国北部の龍山文化期に出現し、わが国には弥生時代以降に出現するとされる。

工字形土錘・棒状有孔土錘については、瀬戸内海沿岸の古墳時代に出土例が多く認められる。(註3)(註4)



- 1. 球状土錘
- 2. 管状土錘
- 3. 管状土錘
- 4. 楕円状土錘
- 5. 円錐状土錘
- 6. 有溝土錘
- 7. 工字形土錘
- 8. 棒状有孔土錘

図1 土錘タイプ別模式図

### 3. 分布

県内の発掘調査で出土した土錘の分布状況図及び一覧表は、先に上総博物館研究紀要で報告してあるのでここでは省略する。(註5) その報告時には遺跡総数は68遺跡を数える。また、ここでは誌面の関係上その報告後に報告された新資料を追加することとした。

- 69. 新道遺跡—千葉市牧橋町1637番地外和泉期の住居址より球状土錘出土。(註6)
- 70. 宗吾西鷲山遺跡—成田市宗吾3丁目455—1他  
鬼高期～真間・国分期の住居址より球状土錘出土。(註6)
- 71. 有吉南遺跡—千葉市有吉町  
国分期の住居址より球状土錘・管状土錘出土。(註7)
- 72. 伊篠白幡遺跡—印旛郡酒々井町伊篠新田字野田341—12他  
鬼高期の住居址より球状土錘出土。

以上の追加資料で、72遺跡を数える。しかし、力量不足による見おとしもあると思われるので遺跡数は増加するであろう。

房総半島は太平洋につき出した半島であり、北東に利根川、北西に江戸川という一級河川が海へ

そそいでいる。また、北総では印旛沼、手賀沼が豊富な水量をたたえている。このように房総半島には水産資源利用の条件は十分にそなわっている。

房総半島全体で出土土錘の状況を見てみると大まかに5つの地域に分けることが可能である。

1. 利根川流域—これは中流域と下流域では若干異なる様相を示している。中流域の神田台遺跡(註8)は球状土錘46点、管状土錘12点が出土しており球状土錘はそのうち最大15g、最少4g、平均7.6gを測る。管状土錘は最大71g、最少26g、平均38gを量る。また、下流域の野尻遺跡(註9)では球状土錘、管状土錘が出土しており、球状土錘は6点中最大55g、最少40g、平均46gを量る。管状土錘は完形品は出土していないが全体に大形化の傾向が認められる。このように下流域の方が土錘の重量は増加し、また大形化の傾向が認められる。
2. 江戸川流域—球状土錘が豊四季遺跡(註10)矢船遺跡(註11)で出土し、山ノ田台遺跡(註12)では管状土錘のみ出土している。

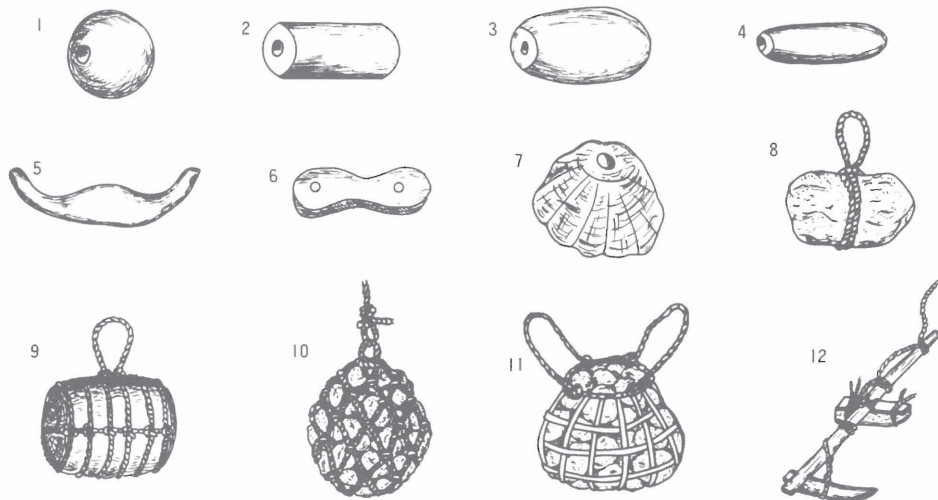


図2 現用沈子・錨類の形状(『網漁具』高瀬増男)



3. 印旛手賀沼周辺一球状土錘が圧倒的に多く出土している。まれに、江原台遺跡(註13)等では楕円状土錘・円錐状土錘・管状土錘も出土しているが、全体に小形のものである。小台遺跡(註14)では、球状土錘のみ出土しており最大50.3g、最少6.7gを量る。
4. 東京湾沿岸地域一北部と南部では若干様相が異なり北部では球状土錘が多く出土しており、南部では大幅に減少し、管状土錘が激増する。大明神原遺跡(註15)、上野塚遺跡(註16)では管状土錘が主体的に出土し、楕円状土錘・円錐状土錘も若干出土している。また、管状土錘・楕円状土錘はすべて大形化を呈している。
5. 九十九里沿岸地域一発掘例は少ないが、下長者遺跡(註17)では管状土錘・楕円状土錘が圧倒的に出土しており、若干の大形化を呈している。

このように発掘調査例の多少はあるが、大まかに別けるとこの5つの特色を持つ地域に区別される。その他、特異な例として、利根川流域にふくまれる阿玉台北遺跡(註18)では棒状有孔土錘が2点出土している。このタイプは県内での出土例はきわめて少ない。

#### 4. 現用例 (図2参照)

現代の漁法には網漁(刺し網・巻き網・引網等)・釣漁(一本釣・延縄)・モグリ漁・雑漁等がある。図2は現代使用の沈子を示したものである。(註19) 1・2・3は鉛または陶器沈子、4・5は投網用沈子、6は鉛沈子、7は貝殻沈子、8は自然石沈子、9は土俵、10・11は定置網用錨、12は木石製錨である。1~7は網そのものに装着されるもので、8~12は網全体を固定するものである。8~12には浮体が必需品となるが、1~7は沈降力も少ないもので網を展張するためのものとされる。つまり、沈子類の沈降力は漁具を展張するために必要なもので、沈子類、網綱類などの総沈降力と総浮力の比は漁具漁法によって異なるとされる。

#### 5. まとめにかえて

1~4項まで雑に走り書きをして来たが、ここで若干の推察を試みたい。

本来土錘とは漁撈具の一部品であり、土錘のみから漁撈具全体を復元することは不可能である。また、タイプの異なる土錘を上げてみたが、同じタイプの土錘のみの使用で一つの網が構成されるわけでもないようである。1~8まで、タイプ別けをしてみたが、1つ1つが複雑に使用され一個の漁撈具としての網漁が行なわれると思われる。しかし、房総半島全体の分布状況を見てみると、5つの地域の特色が示された。一級河川である利根川流域では、下流に行く程、管状土錘が多くなり、重量も増し大形化する。この傾向は印旛手賀沼周辺地域と、東京湾沿岸地域、九十九里沿岸地域の傾向と同じである。印旛手賀沼周辺地域では球状土錘が圧倒的に多く出土し、他の土錘をはるかに凌駕する。一方東京湾沿岸地域(南部)と九十九里沿岸地域では、球状土錘よりも管状土錘が多く出土している。しかも大形化の傾向を見せている。土錘の大形化は沈降力の増大であり、網の大小にも関係する。また、海を中心に漁獲活動を行なう場合、波や潮流による外的圧力も加わる事も条件に入れると、土錘の大形化は自然である。一方印旛・手賀沼のような波静かな外的圧力の比較的少ない湖沼では、小形の土錘でも網漁も可能である。

海を中心とする漁獲活動では、土錘の大形化が見られる。このことは、出土土錘の分布状況からも判明される。

縄文時代には、モリ、ヤス、つり針等個人的使用のおもかけが強くのこされているが、弥生時代以降の出土土錘の定型化及び増加は、ある種の集団的漁獲活動をうらづけるものとしてとらえられるのではなからうか。

しかし、一方では、円錐状土錘のような孔径の小さい、網のおもりとしては不自然な土錘も共通に出土している。この土錘は、江原台遺跡や、上野塚遺跡等にも出土している。このように、自然的条件及び漁獲条件の異なる地域に共通に出土する。

また、網の錘としては極端に小さな孔を有する。このように土錘の中央部にある孔は、装着例から見ても網の大小に関係するものと推定される。このように考えると小孔径のものは、つりの錘と考えた方が妥当のようである。(国分直一氏は山口県羅木遺跡出土の土錘を大まかに分類し、大形のも

のは網漁・細形で小孔径のものを釣漁による「おもり」としている。)

このように、孔の大小も漁法に差異を生じると想定してもおかしくはないであろう。

房総半島においては印旛・手賀沼周辺遺跡からの球状土錘の偏在的な出土。利根川下流域・東京湾沿岸地域・九十九里沿岸地域などの大形土錘の出土は、明らかに漁方法の差異を示しているものであろう。それは、波の荒い海洋か、比較的波静かな湖沼などの漁法の相違によるものであろう。

以上のように、弥生時代以降の漁撈活動の一端を出土土錘で見みたいが、房総半島においては出土例は非常に多いようである。しかし土錘のみでは漁撈活動の全ぼうは明らかにされ得ないであろう。今後は、民俗学による検討及び現用例等さまざまな角度から検討を加える事が必要であり、これらの検討がなされれば、弥生時代以降の漁撈活動は明らかにされてくるであろう。

(4班・空港事務所)

## 文

- 1) 漁網用の「錘」とする説の他に編物、織物などの工用的用途(名取武光 昭35)も考えられる。
- 2) 漁撈具全体から見ると一部分を構成するいわゆる部分品的な存在である。言い換えれば、これら部品の複合体が漁撈具である。
- 3) 現用例では陶器、鉛なども使用している。

## 註

- 1) 渡辺 誠「縄文時代の漁業」 昭48
- 2) 金子浩昌「貝塚出土の動物遺体」 昭57
- 3) 大野左千夫「有溝土錘について」古代学研究 86
- 4) 世界考古学辞典 上 昭54

- 5) 野中 徹「弥生文化期から古墳文化期における漁撈活動」上総博物館研究紀要
- 6) 山武考古学研究所年報 No.1 昭56
- 7) 千葉県文化財センター 千葉東南部ニュータウン14 昭58
- 8) 千葉県教育委員会 「佐原市神田台遺跡」 昭53
- 9) 銚子市教育委員会 「銚子市野尻遺跡」 昭53
- 10) 柏市西町761-3
- 11) 柏市船戸矢船1519他
- 12) 柏市布施字山ノ田台
- 14) 千葉県教育委員会・千葉県文化財センター「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I」 昭52
- 14) 小台遺跡調査会 「小台遺跡調査報告書」 昭56
- 15) 「大明神原遺跡調査報告書」 富津市大字岩瀬字大原
- 16) 「上野塚古墳」 上野塚古墳発掘調査団 昭57
- 17) 勝浦市松部字下長者519
- 18) 千葉県都市公社「阿玉台北遺跡」 昭50
- 19) 「網漁具」 高瀬増男 海文堂

## 参考文献

- 大野左千夫 『三世紀の考古学』中巻 昭50  
大野左千夫 「石錘についての覚書」古代学研究 86  
江藤千萬樹 「弥生時代末期に於ける原始漁撈聚落」上代文化15 昭48  
渡辺 仁「所謂石錘について—先史学に於ける用途の問題」考古学雑誌55-2 昭45  
剣持輝久 「三浦半島における弥生時代の漁撈について」物質文化19 昭47  
樋口清之 「日本原始漁撈の一問題」 物質文化 森 浩一 「古代産業(1)・漁業」『産業史』1 体系日本史叢書10 昭39

## 佐原市吉原三王遺跡出土遺物について

池田大助・澤野 弘・岡田光広・矢野紀子

### 1. 遺跡位置及び立地

吉原三王遺跡は、佐原市吉原字天ノ宮に所在し、下総台地の北端を区切る利根川まで約2.5kmのと

ころに位置する。周辺の台地は樹枝状に発達した谷にかなり開析されており、台地の平坦部はあまり広く残っていない。当遺跡は利根川の支流・根本